

わたしと美術館

大和文華館蔵 「瑠璃螺鈿八角箱」
と正倉院展

高橋隆博

秋たけなわともなると、大和路は一年のうちで最も典雅な風景をむかえます。毎年、恒例の「正倉院展」が奈良国立博物館で開かれるせいでもあります。今年には22年ぶりに、天皇陛下の宝算80歳を慶祝して東京で開かれます。戦後間もない昭和21年を最初として、毎年のように奈良の地で開かれてきましたが、東京でのそれは今回で僅かに四度目を数える程度で、久方振りの開催は、多くの鑑賞者の心を魅了することでしょう。

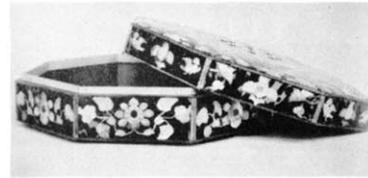
正倉院の宝物が明治の初年、東大寺の大仏殿内で展覧されたことがあります。このことについては存外知られておりません。明治8年、奈良県と一部の有力町民は奈良博覧会を東大寺を会場として開催するのですが、この博覧会はさながら一大古美術展となり、東西の両廂には、奈良県下のほとんどといってよいほどの文化財が所せましと陳列され、大仏殿内には222件、1725点もの正倉院宝物が展覧されました。今年の正倉院展ではいつもより多く、それでも154点の出陳ですから、その規模の大きさがうかがわれます。

文化財保護に対する認識の稀薄な時代に、宝物を展覧することなど今日ではとても許されない無謀な話ですが、まさに劇的な出来

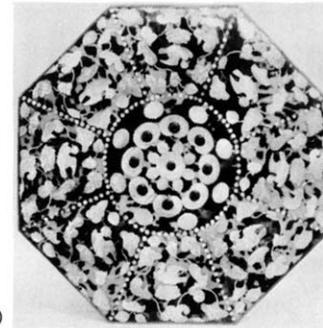
事となったのです。これが、千古の貴重な宝物が一般に公開された最初です。この公開には80日間に実に17万人もの観客呼び込みました。続いて、明治9、11、13年の奈良の奈良博覧会にも宝物は展覧されたのですが、さすがに損傷をおそれて、その後は中止されました。

ところで、正倉院宝物といえば、大和文華館の「瑠璃螺鈿八角箱」が思いおこされます。というのは、正倉院中倉にこれと同一の箱が院蔵されており、文華館のそれはいつの時代にか院外に流出した物の一つであると考えられるからです。螺鈿の剝落が何といても惜しまれますが、正倉院のそれから往時を復元できます。八角形の素地に黄土を置き、全面に瑠璃(べっ甲)を貼り、これに手彫りの螺鈿を象嵌して文様り、その意匠は、蓮葉に乗る鴛鴦・唐花・宝相華・小鳥等で構成しますが、ほとんどの螺鈿は剝落しており、鑑賞者の心をして悲嘆にくれさせます。それでも製作時の美麗なさまをうかがうことはできます。

この2個のほか、民間の某家にも同一のものがあり、これで同じ箱が3個存在することになります。これらについては、すでに重要無形文化財保持者の松田権六先生と



瑠璃螺鈿八角箱 正倉院



同(俯瞰)

大和文華館の前館長石澤正男先生とが共同執筆で、比較照合した結果を「三箇の瑠璃螺鈿八角箱について」(『大和文華』第60号)の論攷で発表されておられ、それによりまずと、次のように要約できます。
①木地の作り方が三箇とも違う。
②螺鈿と瑠璃の取扱い方、形体文様は三箇とも類似する。
③三箇とも同時代の作で、正倉院にあったものと考えられる。

私は、これまで、正倉院の箱をつぶさに拝見したことはありませんが、昨年、私の勤める美術館で特別展「日本の螺鈿」を開催する機会を得、幸いにも文華館と某家の御厚情により、はからずも二つの箱を隣り合せて陳列することができました。その時抱いた素朴な感想を思い起せば大略次のようなこととなります。

文華館の箱は、なぜ連珠文の螺鈿だけが残し、他の螺鈿は剝落しているのでしょうか、もし接着部が脆弱化して剝離したのであれば当然連珠文も欠落していなければなりません。つまり、螺鈿はいつの時代にか故意に剝がされた可能性があるのです。いつ、誰が、何のために剝離したのかを追求することも、この数奇な運命をたどって、今日文華館にあるこの箱についての大事な研究課題であります。また、蓋と身の内部には黒漆を塗ってありますが、これは他の二つの箱にだけみられる特徴です。

一方、某家の箱は、一見して、あるいは近年つくられたのではと

見まちがうほど美麗で、文華館の箱と同様覆輪が欠失(接着塗料の跡が残っている)しているだけでほぼ完全な状態を保っています。

さて、この3個の箱がほぼ同時期に製作されたのであれば、おそらく同一人物の手になるか、あるいは、少くとも同じ工房でつくられたと考えてよいと思われれます。もし、そうであれば、次のような疑問が浮かび上がってきます。それは、なぜ木地の材質が3個の箱ともちがっているのだろうか(正倉院=牟久木 文華館=榎 某家=杉か松)ということ、そして、どうして木地のつくり方、つまり構造が三者三様に異なっているのかということ。つまり、同一人物、あるいは同じ工房の手になる製品であれば、同材・同構造・同技法であると普通は考えられるからなのです。あるいは逆に、それぞれの相違にこそ、天平工人のたゆまざる技術の創意と工夫をみるべきなのでしょうか。想像と疑問はとどまりません。

ともあれ、私は正倉院展の開かれる秋の頃になると、ふと瑠璃螺鈿八角箱が思い出され、可能なら3つの箱を一堂に会して鑑賞者の眼を楽しませて欲しいものだから、それもまたもう一つの正倉院展であろう、などと夢を描いているうちに、東京国立博物館ではもう今年の正倉院展がはじまっています。(奈良県立美術館学芸員・漆工史専攻)

瑠璃螺鈿八角箱 当館



瑠璃螺鈿八角箱 某家蔵

